

暑さ、寒さも彼岸までとは、昔の人はよく季節の變化を折に触れてうまく表現したものと感じします。

しかし、ある人が言っていたように、確かに現代は温暖化の影響なのか、ほとんどの草花の開花時期が早くなってきております。

先日から長崎市中心部メルカ築町のちようど道路脇の路地でいくら早い開花といっても、一般的には初夏の花といわれるシヤガの花を見つけた時にはさすがにびっくりしました。

いずれにしてもこのお彼岸というのは昼と夜の長さが同じ(厳密には少し違いますが)、また暑さ寒さも彼岸までといわれるように気候的にも過ごし易い時期であり、みな

さんもお寺やお墓におまわりに行くことも多いでしょう。

筆者も去る二十一日の春分の日に檀家の一員のため伊良林町の「飴屋のゆづれい」でも知られる光源寺に彼岸の法要に行つてまいりました。

この日は布教師として本山から派遣されて来た広島県内の住職でもある安国真雄師の法話もありました。

この師の話は約三年前に拝聴して一番印象的だったことは、「今の親は少子化傾向で育てる子どもの数が少ないこともあつてすぐいろいろ言い過ぎる、おかまい過ぎる。もっとだまって見ており、子どもが相談にのつてきた時にアドバイスを与えてやればよい。要するにだまって、しかしただだまってではなく、常に心を通わせな

がら見ていなさい」というようなことをユーモアを交えて話されました。

今回の法話でもいろいろ話をされたが、特にヒガンバナについて、これは秋の彼岸の頃咲き、今の時期はまっすぐに伸びた葉だけである。要するに「葉は花を見ず、花は葉を見ず、彼岸花」つまり今の時期は葉だけのためまったくヒガンバナは注視されない

が、葉は秋に満開の花を咲かせるための一生懸命な準備であり、このような自然の摂理からいふんなことを学んで欲しい、というような話をされていた。

「基本について」
基本は、どんな世界においても重要であり、仕事及び人との付き合い等を含め、様々な場所において自身身の定まった基本がないと世の中を渡っていくのは難しい。

また、スポーツや武道その他芸事においても、まずその基本を確実に会得してからでないとは応用がでないことは、周知の通りである。

基本的な動きや考え方が判るまで、いろんな苦労があり、また、地味な努力となるため、当然そこには年数がかかる。

しかし、このことは当たり前であつて、逆に即席で成り立つたものは、いくら良く見えても崩れる可能性が高い。

何事も、基本を確実に身に付けるために人は一生懸命に努力しなければならぬ。

ところで、人間が生きて行く上で最も基本的なことを学び、そして基本の大切さに気づくのはどこであるかという点、それはやはり家庭ではないだろうか。

父や母がまずは子供に、言葉を教え、してはいけないこと、危ないこと、挨拶、礼儀、そして、悪いことをしたら叱られ、また諭されその他様々な道徳的なものは、まず親が教えるのが自然の流れであり、人としての基本的な生き方及び考え方を知らず知らずのうち学んでいくことになるのである。

しかし、近年は、親もそうしたこと教える余裕がなく、自分自身のことすら普通にできないのが現状であるといふことは、近年のいたましい出来事が発生している状況からみても明らかである。

平成十七年三月十三日(日)第三五三回有段者交流研修会において、砂泊先生は「学生がもうすぐ卒業という時に、学生自ら起こす事件事故が多く、せっかく親は一生懸命に働き、そ

して仕送りをしているに
もかかわらず、そうしたこ
とが起こることは残念で
ある。このことは自分自身
の生きていくための基本
及び目標がしっかりして
いないからだ。」というこ
とを話されている。

現代の事件事故は、場所
も関係なく予想できない
ことが新聞紙上等に掲載
されており、他人事として
受け止められなくなつて
きており、だれでも、何ら
かの形でいろんな出来事
に遭う可能性はあるので
あるのである。

そうしたことから、人は
自身の人生を生きていく
上で、決してわき道へそれ
ることがないように、普段
からの自己コントロール
が必要だ。

幸いにして我々は、何事
も基本が大切であるとい
うことを絶えず砂泊先生
から、教わっている。

砂泊先生は、「人が生き
ていく上で、必要なことは
愛であり、そして死ぬ時に
いい人生であったと言え
るならば、その時点でその
人は最も強い。」というこ
とを言われており、そうし
たことが世の中を生きて
いく上で大切であること
を示されている。

つまり、合氣道の精神を
基本としていくことが、合
氣道の技のみでなく、人が
生きていく中で、最も重要
であるということを毎月
の交流会において指導を
受けている。

こうした指導に対し、
我々は敬意を払い、そして
人生の中でこの偉大なる
師から教育を受けている
ことは、誇りである。

先生の教えは、人間とし
て何が大切であるかを皆
が感じているからこそ、そ
う思うのである。

我々は、何事も基本が大

事であるということをも
つと自覚し、合氣万生道の
教えを中心にし、日常の社
会生活を過していかなけ
ればならないと思う。(平
成十七年三月十六日 浜
田)

旅シリーズ「信州編第
二号」

前々回号では、確か上高
地まで到着。ここから梓川

沿いの右岸(河川は下流に
向かって右側を右岸とい
う)脇の林道を上っていく
と、約一時間で明神池に到
着、周囲は国有林であるが
ここだけは神社有地にな
つており入場料を支払つ
て少し奥にある池まで入
つてみる。水は透き通つて
おりまさにいっぶくの池
泉回遊式庭園を眺めてい
るようである。入り口近く
には北アルプス近代登山
の先駆者といわれるウエ
ストン卿が一九〇九年(明
治四十二年)に穂高岳縦走

した際に(それまでも山菜
取りや獣捕り、あるいは山
岳信仰登山等日本人の間
でも山登りは行われてい
たが、純粋に登山のスポー
ツ的な側面を重視したの
はこの頃からである)、ガ
イドと案内した嘉門治ゆ
かりの嘉門治小屋で休憩
したあと更に上流部へと
上っていく。

やがて河畔に最上流部
の新村橋が見えてきた。は
るか上のほうに聳える穂
高の峰々を仰ぎながら橋
を渡るとやがて徳沢に到
着。ここは主要な登山ル
ー

とである左岸側歩道沿
いの最も大きな北アルプス
への登山基地であり、山小
屋周辺一帯は休憩してい
る登山客でそれこと銀座
並みの混雑ぶり、そのほと
んどが中高年の登山者で
あり、新聞等で体力不足や
未熟な登山者による事故
等記事が多いこともうな

ずける。

上高地に戻り、ウエスト
ン碑を見た後、上高地アル
ペンホテルでつかの間の
コーヒーブレイク。ここか
らは以前はバスと途中の
島々駅からの電車を乗り
継いで行っていたが、便利
で早い直行バスで今日の
宿泊地長野市内へ。(以下、
次号)

お知らせ等

去る三月九日、新五島警
察署にご栄転された平井
さん(万生道三級)の有志
による送別会を行いました。
平井さん、お元気で!
なお、五月連休の臨時休み
等は後日お知らせします。

